土木遺産な旅のつくり方

川で運ばれ米が集まり
酒や麹づくりの生業も生まれ
まちは栄えました

まちの土木遺産を探してみましょう

九州地域づくり協会では、近世から昭和期の土木施設を対象に、先人達が時代の技術や叡智を結集し、後世のために築き上げてきた247施設（群）を、「土木遺産in九州」としてホームページでご紹介しています。

マイ土木遺産を見つける楽しみ

しかし、九州は実に広く、まちにはまだまだたくさんの土木遺産が潜んでいます。そして、この本では道路や、防災施設、水路など、中には選定されていないものも数多くとりあげています。土木遺産は、暮らしに密接に関係し、役立ち、歴史や文化、産業、自然環境に深く関わっているもの――そういうまなざしで見始めると、まだまだたくさんの土木遺産が、実はすぐそこにあるのです。

まずは気になるものを見つけて、その点を水の流れや道といった線で繋いで、世界にひとつの土木遺産な旅のルートをつくってみませんか。

まずは「# 土木遺産」でたどってみましょう

土木遺産 in 九州

一般社団法人 九州地域づくり協会
http://dobokuisan.qscpua2.com/

土木学会選奨土木遺産

公益社団法人 土木学会 選奨土木遺産委員会
https://www.jsce.or.jp/contents/isan/

九州の近代土木遺産

公益社団法人 土木学会西部支部
https://www.jsce.or.jp/branch/seibu/05_heritage/02.html

実はマニアックな史料館や資料館図書館郷土史コーナーは土木遺産の宝庫

図書館の郷土史コーナーは土木遺産の資料の宝庫。江戸時代や昭和の時代は地域の記録が本として残されているので、インターネットでは手にはいらない、貴重な資料に出会えます。

石碑や看板はものいわぬ土木遺産の熱き語り部

地域を歩いたり自転車で巡ると見えてくる石碑や説明看板は、土木遺産の歴史や役割を後世に伝える語り部です。後世に伝えたいという思いが詰まったメッセージは、土木遺産の魅力を熱く物語ってくれます。

土木遺産を見つけたら、6つのポイントで旅のルートをつくってみましょう。

土木遺産な旅づくりの6つのポイント

今まで訪れた観光名所で、実は土木遺産だったという時など、手始めに、この6つのポイントで見つめ直して、再び訪れてみてください。土木遺産がそこにある訳がわかり、風景が変わる体験ができるかもしれません。

1 交点に土木遺産あり

土木遺産は地域をつなぎ、静かに貢献しています。その交点を見つけて、人やものの流れを観察してみましょう。

2 鳥の目で見る

ひとつの土木遺産を見つけたら、ぜひ地図を広げ、上空から鳥になった気持ちで眺めてみてください。水や道を追うと、土木遺産が果たしている役割が見えます。

3 必要だった訳を知る

その土木遺産はどうして必要だったのだろう。その訳を知ると、現在の暮らしでごく当たり前となっていることに気づかされます。土木遺産の物語には、それらがまだなかった時代の、人びとの「悲願」と「希望」があるのです。

4 何でできているか考える

幾多の困難を克服してきた土木工事の根本に「材料」があります。大きな構造の土木遺産も、何でできているかを考えると、味わい深いものになります。

5 新旧を比べる

街道の今昔、橋の新旧などを比べてみるとたくさんの発見があります。機械もない時代の土木技術に思いを馳せ、いろんな地域の土木遺産を比べてみてください。

6 人を想像する

歴史に名を残す人物、技術者はもちろんのこと、土木遺産には時として何万もの人が命をかけて関わっています。その恩恵とともに思いを寄せ、土木遺産を味わってみてください。

福岡県柳川市の風物詩、川下りの風景。どんこ船がいく堀割は、筑後一国柳河城32万石の城主となった田中吉政が巡らせた城堀ですが、湿地帯だった柳川の人びとは、中世の時代から農業用水、生活用水の確保のため、網の目のように掘割を巡らせていました。この水は田畑を潤し、有明海へと注いでいます。川下りコースには右手に扇、左手は望遠鏡を持った、吉政の銅像が建っています。

掘割の総延長は
900キロもあります

この深い谷を越え、貧しい生活を送っていた白糸大地へと笹原川の水を送り、田畑をつくるということがいかに悲願であったことか。最初の通水では、白装束に身を包み、懐に刀をしのばせた矢部手永の惣庄屋布田保之助の身体の下を無事水が通っていったと伝えられます。通潤橋を渡ると、水圧に耐えられず失敗を繰り返しながら種山石工たちがたどりついた、3本の石管を見ることができます。

この高さまで
どうやって
石を積んだんだろう

福岡県うきは市の大石堰が見える河岸へと降りる道。「筑後川がありながら土地が高く水が使えなかった」という意味がよくわかる坂道です。

日本初なんです！

長崎市の本河内低部ダムの放水路橋は、日本で最初の鉄筋コンクリート橋。本河内高部ダムの設計者であり、西日本11都市、18ヶ所の水道施設建設に関わった吉村長策の生涯は、日本の水道の歴史そのものです。100年たった今もそのほとんどが使われ、改良されても可能な限り保存されています。

旅に、ご案内と体験をプラス

「土木遺産」を旅するとき、活動団体やボランティアガイドのご案内は、心強い味方です。

道をテーマに、景観、自然、歴史、文化等の地域の資源を活かした活動を全国で繰り広げている「日本風景街道」は、その情報の宝庫で、九州でも登録されている15団体のみなさんが活動をしています。

最適なルートや、ふだんは見ることのできないもの、地域ならではの体験、人との出会いがあり、その旅はきっと忘れられないものに。

「#九州風景街道」で、ぜひ検索してみてください。

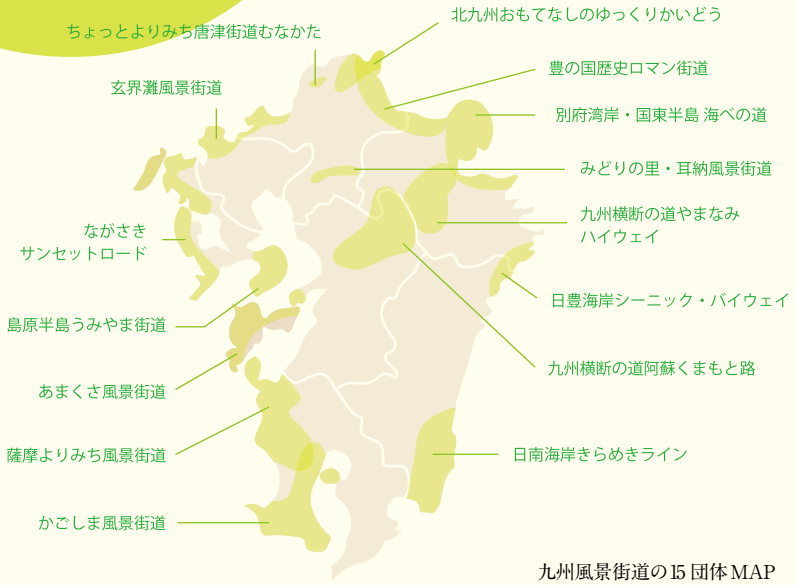
みどりの里・耳納風景街道

「久留米ほとめき歩き」での山苞（やまづと）の会の皆さんのガイドによる田主丸ツアーの風景

○ 福岡県久留米市

シーニック・バイウェイ（Scenic Byway）とは、Scenic（景観のよい）、Byway（脇道、寄り道）といった意味の造語で、地域の魅力を活かす取組みやそのルートを表現する1980年代のアメリカで提唱された言葉です。「日本風景街道」は、日本型のシーニック・バイウェイとして、平成19年から登録が始まり、全国を舞台に展開されている活動です。

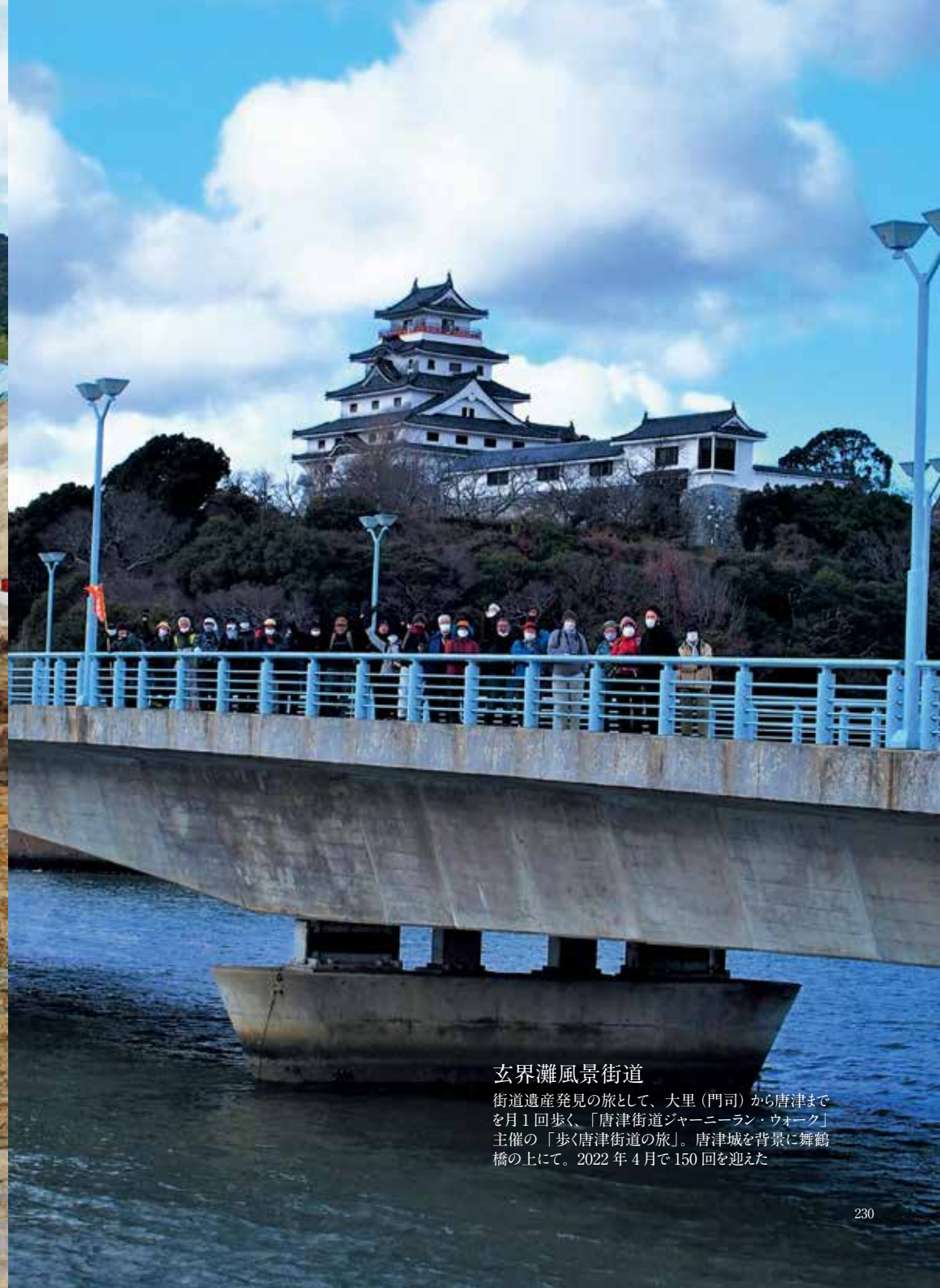
#九州風景街道は
土木遺産な旅の強い味方
地元ガイドとの出会いの場です



九州風景街道の15団体MAP

風景街道
ながさきサンセットロード

長崎県の松浦から野母崎までの美しい夕日が見える海岸線（国道 202 号・499 号がメインルート）をテーマに活動する「ながさきサンセットロード振興会」が企画した、西彼杵道路時津工区の工事現場の高校生フォトツアーの風景



玄界灘風景街道

街道遺産発見の旅として、大里（門司）から唐津までを月 1 回歩く、「唐津街道ジャーニーラン・ウォーク」主催の「歩く唐津街道の旅」。唐津城を背景に舞鶴橋の上にて。2022 年 4 月で 150 回を迎えた

八女から山鹿を旅してみました

伝統的街並みを土木技術でたどる旅

八女福島と山鹿米米惣門

旅で通る道は、いつもはさっと車で通過しがちですが実は旧街道であったり、土木遺産の物語にあふれています。6つの旅のポイントで、福岡県の八女から熊本県の山鹿への旅をつくってみました。

徒歩から馬車、そして車変遷を思いながらルートづくり

まず、鳥の目で地図を眺めてみると、江戸時代に熊本と福岡の小倉を結んだ参勤交代の道「豊前街道」が見えてきました。明治時代にはいると、街道が国道として継承されることが多い中、ルートが違うのはなぜ？という疑問が。

江戸時代は徒歩による移動が主流でしたが、よりたくさんの物を運ぶため、車輪をもった馬車や荷車、やがて自動車の役割が重要になると舗装道路が必要になりました。さらに土木技術が進歩し、深い山の中や大きな川にも道路が通るようになりました。道と、人やものの動きの変遷をたどってみます。

八女福島の街並み

福島の町家建築の特徴は、「居蔵（いぐら）」と呼ばれる土蔵造り。江戸時代以来しばしば大火に襲われたことから、江戸末期から明治にかけて建てられた。明治、昭和初期の2度の道路拡幅に伴う町家の軒切りで、1階の意匠は大きく変化しているが、2階は多くが昔のまま。道路の色の違いは、道路拡幅の名残り

田中吉政は
織田、豊臣、徳川の時代を
信頼を得ながら生き抜き
筑後に来たんです

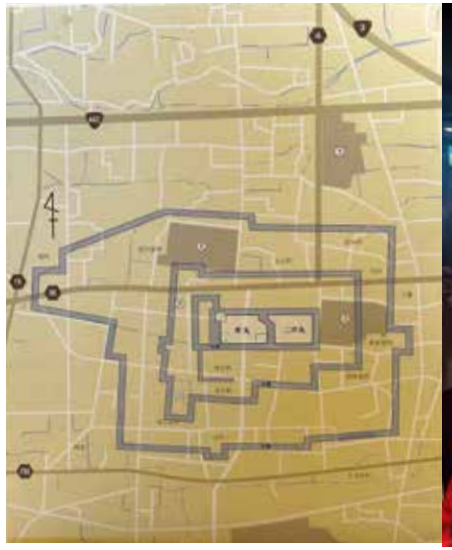
昭和58年度（1983年度）の八女広域青年大学の皆さんで作成した福島城のジオラマ模型。制作の思いを語る、福島の白壁の街並み保存の先駆けとなった店を営み、田中吉政研究会のメンバーでもある江崎久美子さん

都市計画の神様
田中吉政がつくった城下町

起点となるのは『日本書紀』に登場した女神・八女津媛（やめつひめ）の名が地名の由来といわれる八女。関ヶ原の戦いで石田三成を捕らえた功績により、慶長6年（1601）、32万5千石の筑後国主として柳河城に入った田中吉政が、支城として大修築した福島城の城下町です。

吉政は矢部川から水を引き入れた三重の堀で城を囲み、往還道路と中堀・外堀の間に短冊状の地割を行い寺院、侍屋敷、町屋、職人町を配置します。八女の伝統工芸の和紙、仏壇や提灯、農業の米や茶、い草の基盤は、この時代にかたちづくられました。八女福島の白壁の街並みを歩くと、当時の幅の城堀跡といわれる「文化池」や、道路の下、路地の水路と、水の流れがあることに気づきます。

また入城の翌年には、軍事目的のため、柳河城と領内に配置した久留米など八支城とを結ぶ交通



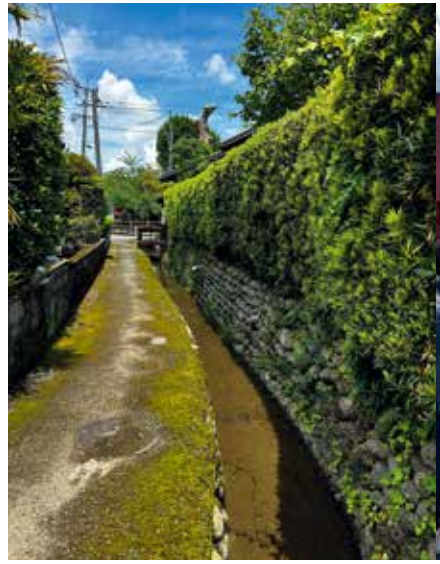
右／三層の天守閣だった福島城の鯱（しゃちほこ）。
素焼きで高さ61センチほど
左／福島城跡と現在の道（八女広域青年大学作成）
○ 福岡県八女市

路の整備を行います。中でも柳河城と久留米城を結ぶ道は「久留米・柳川往還」（現在の福岡県道23号）、別名「田中道」と呼ばれる重要な道筋でした。ほぼ直線の五里（約20キロ）の道のりは、夜間に2列の松明を焚いて直線を見極め、両側に水はけ用の溝を掘って中央に土を盛り、低湿地帯の悪条件を克服しました。

同じ年、現在の大川市からみやま市に至る潮止め堤防「慶長本土居」は、総延長32キロのうち25キロの第1期工事を、わずか3日間で完成させます。

自らの足で見廻り領民の声をきく

吉政は自らの足で広大な農地を見廻り、畦に座って領民に恩恵について丁寧に説き、それが大工事の原動力になったといいます。築堤は有明海干拓の広大な新田開発に貢献し、吉政は、筑後川、矢部川の治水、利水工事、有明海へ通じる運河の整備など、



右／文化池を見守る水神様
左／路地を流れる、魚泳ぐ水路
左ページ／城堀跡といわれる福島八幡宮横の文化池

矢部川の利水・治水の歴史を語る実は、城堀跡

筑後全体で、まさに都市計画というべき国づくりを行いました。しかし慶長14年（1609）、吉政は家康に招聘され江戸へと向かう途中、京都伏見で没します。

享年62歳でした。

豊臣と徳川の最後の戦いとなった大坂夏の陣直後の慶長20年（1615）、大名が大きな軍事力を持つことを防ぐため、幕府が公布した一国一城令により、福島城を含む十支城は廃城となります。二代目忠政は跡継ぎがないまま没したため田中家は改易となり、元和6年（1620）、筑後国は久留米藩主有馬豊氏（とようじ）をはじめ、柳川藩、三池藩の三藩分立となりました。

吉政は8年、二代目の忠政は12年。わずか20年の短い治世でしたが、陸路、水運開発の功績で、八女福島は、その後も交通要衝の地、物産集積地として久留米藩内で最大の商家町として大いに栄えました。伝統工芸が今に受け継がれ、農業が盛んなのは、道を通じてものが運ばれていた証です。

福島の街並みが残ったひとつの理由

地の利がある一方、それゆえ、明治時代に入り、近代化の洗礼を受けたのも福島でした。

北に国道442号、東に国道3号、国鉄（現在のJR）羽犬塚駅からは「馬車軌道」、久留米から「電気軌道」が通ります。昭和40年代以降には国道3号バイパスの完成、九州自動車道八女インターチェンジの開設、国鉄矢部線の廃止などにより車中心のまちとなり、商店がバイパスや環状線道路沿いへと移ります。

往還道沿いの福島は、商業機能は失ったものの、逆に開発を免れ、町人地は残りました。

しかし、時代とともに、ひとつ欠け、ふたつ欠けしていく街並みに危機感をもった八女の人びとが、平成5年（1993）に、「八女・本町筋を愛する会」を発足。翌年には、「八女ふるさと塾」が新たに発足しました。

左ページ右列上／ NIPPONIA HOTEL
右列中／代々酒造業を営んでいた「堺屋」の離れ。木材の贅を尽くし一富士二鷹三茄子が隠れている。木賓客の応接間で陸軍大将乃木希典も訪れた
右列下／賑わう食事処　左列上／旧往還道
左列下／庭の水琴窟の音色に耳傾けるひととき

八女にはかつて
12の酒蔵があり
残された建物が
活用されてます

活動は深まり、その後、国の「重要伝統的建造物群保存地区」選定に至ります。

保存のための建築技術の継承、空き家の保存活用など。語り尽くすことのできない30年。その地道な取り組みの積み重ねによって、今、暮らしとともに、その伝統的な街並みに共感する瀟洒な商店やカフェ、宿が営まれ、八女を訪れる楽しみとなっています。

行く先々で問いかけると、誰しも、保存と再生のまちづくりの伝統と、そのドラマを語ってくださるのが印象的な城下町。

物語に耳傾けながら歩く、八女福島の旅です。

旧往還道の風景

八女を拠点に伝統工芸品や物産の地域商社として創業した「うなぎの寝床」をはじめ、カフェ、食事処が並ぶ旧往還道は、車も少なく、ゆっくりと歩く楽しみにあふれている

八女を起点に、ものが運ばれたルートをたどり、地図を鳥の目で見てみたら、国道と旧街道の交点に、山鹿があり、途中、峠や石橋など、土木遺産なスポットを発見しました。

国土地理院地図を加工して作成

それにしても気になるのは旧豊前街道の「腹切坂」。どんな物語があったのでしょう？

峠というからには地形の克服に物語あり

峠は、ここを切り拓くという決意の地です

小栗峠

五木寛之はエッセイ『地図のない旅』の中で小栗峠の「ちょうど真ん中」に父が開いた峠の茶屋について「あれは峠の茶屋というより、日本のドライブインの草分けではなかっただろうか。」と書いている。峠の茶屋は現代のドライバーの休憩所である小栗峠ロードパークのあたりにあったのかもしれない

戦略としての悪道

明治13年（1880）の福岡県議会で、国道の久留米～山鹿間の「悪道」区間を改善するための議論がなされた記録があります。

悪道とはなんとも不名誉な言葉ですが、当時の久留米～山鹿間は旧豊前街道。これは藩の戦略上、あえて険しい道としたためで、不便で、いざというときの戦を想定し、車馬による運搬の妨げになるような道でした。

一旦は否決されますが、「九州の中央を貫通する第一の要路と称すべきもの」と、その後も地域の発展と産業振興のため、議論が続けられました。そして明治19年（1886）、政府の支援もあって計画が決定し、久留米から八女を経て山鹿を繋ぎ、県境にある難所、小栗峠を通るルートとなります。

ルート決定の陰には、険しい峠に道路を拓くための技術の進歩があっただけでなく、「良い道にしたい」という思いを持った人びとの尽力がありました。

橋本勘五郎がつくった高井川橋

小栗峠を少し進むと、アーチを描く石橋「高井川橋」があります。明治14年（1881）の国道3号（当時は国道11号）の開通に伴い、明治政府の命により熊本県山鹿市鹿北町を流れる男岳川に架けられた石橋で、石工棟梁は、名石工、橋本勘五郎。息子、弥熊とともに親子で架橋に関わりました。親柱には擬宝珠、添え石には飾り円のくり抜き。約100年間、国道にかかる橋として利用されてきました。

今は鉄筋コンクリートの橋が隣に整備され、国道の交通量を支えていますが、現在も市道として、暮らしになくてはならない橋として保存され、使われています。柵の向こうではありますが、およそ9万年という時を刻む、阿蘇の溶結凝灰岩でできた橋の欄干にそっと触れてみると、丸みに石工たちのノミ跡を感じます。

高井川橋
○ 熊本県山鹿市

石畳は、今でいうアスファルト舗装の役目。大八車を引くことを思うと、必要だった訳がわかります。旧街道と国道の新旧を比べるおもしろさがあります。

腹切坂
○ 熊本県玉名郡和泉町

腹よりも息が切れる腹切坂

「腹切坂」は、和水町の旧豊前街道に残る急勾配の坂です。幅は約3～5メートルで、周りを杉や雑木に覆われ、苔むした石畳の坂は、街道屈指の難所として知られ、坂を上りきるころには息が上がってしまうほどの勾配です。

物騒な名の由来

その名の由来は、諸説あります。

ひとつは矢傷を追って逃げ延びた平家の落ち武者が、この険しい坂道に差しかかった際、「もうこれにて余が武運は尽きた」と言い、見事腹を切って果てたという説。

また、その日のうちに肥後細川藩に届けなければならない江戸からの大事な書状を携えた飛脚が、お腹をこわし、坂の途中で倒れ込んでしまい、通りかかった農夫に「頂上まではどのくらいあろうか。」と尋ねたところ、そこがちょうど坂の中間だったので、「貴方がこれまで来た道程はありましょう。」との答え。飛脚は300里（約1178キロ）の道を駆けて来たことから勘違いし、絶望から腹を切って命を落としたという説など、坂の険しさにちなむ悲しい物語があります。

ものが運ばれ経済がまわる

旧豊後街道と国道3号の坂の傾斜を比較すると、旧街道の方が緩やかに見えますが、腹切坂に注目すると急激な高低差があることがわかります。

自分の足で歩くと、腹切坂を参勤交代や、馬や大八車で重い荷物を運びながら上り下るのには、大変な苦労があったことは想像に難くありません。明治時代になって現在の国道3号のルートが選ばれたのは、こうした難所を避けるためという目的もあったのではないでしょうか。

大型トラックを見る目が変わる腹切坂です。

菊池川の水運が運んだ米。「米米惣門ツアー」で、その歴史や米にまつわる生業をご案内いただくと、いきいきとかつての風景や人を想像することができます。

続いて豊前街道と国道の交点にある山鹿市へ。

阿蘇の麓から有明海まで流れる菊池川流域は良質な米の産地で、水運を利用した米の一大集積地でした。山鹿は熊本からの参勤交代で最初の宿場町で、300年あまり前の『山鹿湯町絵図』に描かれた道がそのまま残っています。

米米惣門のみなさんとの出会い

「惣門」とは、当時、街道から町に入るために菊池川に架かっていた橋の手前にあった門のこと。治安維持のため夜は門を閉じ、橋からの往来を制限していました。その門が開かれたかのように、下町惣門会の商店主のみなさんが、街道沿いの歴史を紐解きながら、笑いにあふれたトークリレーでご案内してくださるのが「米米惣門ツアー」です。

まずご案内いただいたのは天正6年（1578）創建の「光専寺」。熊本城築城の際、余った材木で造

右ページ上／菊池川から大阪・堂島へと米が運ばれた
米相場では菊池米は最高級ランクだったという
右ページ下・右下／米米惣門ツアーを始めた木屋本店八代目の井口圭祐さん
右上／復元された惣門　左／光専寺

上／室蓋と麹の体験
左ページ／木屋本店九代目の井口裕二さん。
お店は江戸天保年間（1830頃）に建てられたもの

られた桜門を構える歴史ある古刹です。境内には、江戸時代、米問屋で豪商の宗方屋が寄進した二切経を納めた経蔵があります。明治10年（1877）の西南戦争では薩軍の野戦病院ともなり、この地が交通の要衝であったことを物語ります。

菊池川流域の米で仕込んだ米麹を味わいながら

続いて江戸天保年間（1830）創業の麹屋「木屋本店」へ。名字帯刀を許された初代が街道沿いの今の場所に、造り酒屋を開業したのが始まりです。明治時代に、地元の米にこだわる麹と麹食品の製造業となりました。平成12年に米米惣門ツアーを始めた8代目と、九代目が伝統の味を守りながら、麹を使った新たな調味料も人気を集める老舗。

先祖代々受け継いだ石室や室蓋（むろぶた）で仕込む製法をうかがいながら、真っ白でふわふわの麹を五感で体験。この麹が美味しい味噌や醤油、甘酒を生むのです。

「千代の園酒造」は、明治29年（1896）創業の、もともとは米問屋だった酒蔵です。日本が、千代に八千代に栄えることを祈り、千代の園と命名されました。米問屋だっただけに米に対してこだわりも強く、初代本田喜久八は「九州神力」という新しい酒米の品種を作り出したほどでした。

史料館で、昔、実際に酒造りに使用していた道具の数々を見て、試飲する純米酒の美味しさ。稲作の豊穣を見守る田の神が蔵を見守っています。

米粒から2秒で米せんべい

続いて、熊本県産のお米と天然塩にこだわった「せんべい工房」さんへ。昔ながらの窯での手焼きせんべい体験です。金型に生米をいれて、窯にセットしたら心棒をまわし、圧力をかけます。緊張の一瞬から焼き上がりまで、わずか2秒。工房は笑いと歓声に包まれます。焼きたてのおせんべいは、さくさくとして、口の中で溶けるやさしい味わいです。

右／田の神　左上／「せんべい工房」での体験風景
米米惣門の名ガイド、店主の阪梨文夫さん
左下／千代の園の蔵

千代の園酒造史料館
昔、実際に酒造りに使用していた貴重な道具や古地図、写真の数々

小路

街道の脇には、それぞれ名前がついた山鹿独特の生活道路「小路」（しゅうじ）が通る

人力車で小路探索ができるそうですよ

米への愛にあふれて

米米惣門ツアーが始まったのは、平成12年のNHK朝ドラ「オードリー」のロケがきっかけでした。やってくる人たちを案内しようと歴史資料を掘り起こして毎週開いた地域の勉強会。そこで初めて「米」が宝であることに気づかれたとか。水運はとだえても米への愛にあふれたお話しに、米俵が行き交う川や街道の風景が立ち上ってくる米米惣門ツアー。川と街道の交点には、食と深くかかわる素敵な土木遺産の物語がありました。

菊池川と米が米米惣門のテーマです

山鹿温泉は、平安時代の「和名抄」にも記された温泉郷。泉質は柔らかく湯量も豊富で「山鹿千軒タライなし」と唄われるほど

山鹿湯のまち 忘りゃりょか

山鹿灯籠まつり『千人灯籠踊り』

その起源は、深い霧に行く手を阻まれた景行天皇の巡幸を、山鹿の里人たちが松明を掲げ無事にお迎えしたことに由来するといわれる。『よへほ節』の調べに合わせ、幾重にも重なる金灯籠の輪が、見る人を幻想的な世界へと誘う

土木遺産な旅ノート

400年の水の流れをたどる旅

筑後川・耳納（みのう）北麓 編

大石用水取水口
○ 福岡県うきは市

大火の歴史から
防火用水の
役目もあるんですね

発見と思い出を伝える旅ノート

筑後川中流の福岡県うきは市、久留米市、対岸の朝倉市の歴史ある堰をテーマに、土木遺産な旅のルートをつくってみました。地図を鳥の目で見ると、堰から引き込んだ水が市中を網の目のように流れ、水を利用する仕組みがあることに気づきます。

まだ機械のない時代に考えられたそれらの技術を受け継ぎながら、何百年と大地を潤してきた地域を旅してみると、自然な川のように見えた流れも、人工の川であることや、水車跡に気づいたり、水との暮らしが見えてきました。そんな発見や思い出を書き留め、伝える旅ノートです。

鳥の目で見ると、400年の水の歴史を知るコースとなりました。広がる農地は堰が必要だった訳を知る風景。どうやって取り入れ、分けているのか、水の流れをたどる旅です。

国土地理院地図を加工して作成

⑨ 南新川
角間天秤で分水された水路。農業用水に使われたほか、吉井町の中に流れ、水車の動力などにも使われた。

⑧ 角間天秤
大石水道の水を水量調節し分配するための施設。水路内に置かれた大石により水量を調節している。

⑦ 長野サイフォン・長野水神社
昭和33年(1958)、隈上川に合流していた大石水道を、川底を潜ってサイフォンによって流れ出る仕組みに改造した。

⑫ 三連水車
堀川用水が引かれたあとも、水を田畑に上げることができない地域で、水を引き上げる自動回転の水車が発明された。

⑪ 堀川用水
過去の取水口は下流側だったが土砂が溜まり取水できなくなったため、享保7年(1722)に岩を切り貫いて取水口が作られた。

⑩ 山田堰・水神社
堀川用水の水量を増やすために築造された堰。昭和55年(1980)の水害で損傷し、現在の堰はその翌年に復旧されたもの。

③ 田榮（たさか）神社
袋野隧道、袋野堰を拓いた田代重栄を祀った神社。元々は隧道を掘った坑夫たちが重栄を称えて岩肌にその像を彫ったもの。

② 袋野隧道
延宝7年（1679）に完成した水路。吉井町の大庄屋が大石地域の灌漑のため、約1.7kmのトンネルを私財を投じて完成させた。

① 夜明ダム
昭和29年（1954）に完成した発電用ダム。建設中に起きた28水害で一部が破損。ダム完成により上流の袋野堰が水没した。

⑥ 筑後川大石分水路
昭和28年(1953)の大水害を受けて計画された、洪水時に安全に水を流すための分水路で、昭和43年（1968）に完成。

⑤ 大石水神社（五庄屋遺跡）
大石水道の取水口脇にあり、水道の完成に際し、五庄屋が自然石をたてて水路の守り神としたのが始まり。

④ 大石堰
五庄屋が水利に恵まれない吉井町以西のために計画し、久留米藩の藩営事業として実施。大石水道の取水量を上げるため設置された。

すべての堰は、あるべきところにある。

九州一の大河、筑後川を旅した。

古くからか灌漑や舟運など、地域に深く関わってきたこの川は、洪水が頻発する暴れ川。人びとは様々な工夫によって川を治め、水を利用し、川とともに暮らしてきた。

まず向かったのは、筑後川で最も有名な堰といえる「山田堰」。江戸時代に作られ、今も広大な農地を潤している。今では水田が広がる筑後川中流域も、かつては低い位置を流れる川の水を利用するすべがなく、干ばつの常襲地帯だったという。筑後川の水を引き入れる「堀川」の水門は元々は今より下流にあり、より多く取水するために、湾曲した川の水が当たる今の位置に変更された。

また、筑後川の水をせき上げてさらに水量を増やすために作られたのが山田堰。水門上に建てられた水神社からは、急流に耐えるために流れに対して斜めに作られた山田堰を見渡すことができ、機械もなく技術も未熟な時代に難工事に挑んだ先人の知恵と苦労がしのばれる。

筑後川を斜めに横切る山田堰と人工の堀川

白壁の街並みと新川の流れ

「角間天秤」で大石水道の水が南新川と北新川に分かれる

水と道が交差し、まちが栄えた

筑後川四堰の一つ、「大石堰」から取水された「大石水道」の流れをたどると、川の下を交差して水路が流れる「長野サイフォン」や、用水を分配するための分水工「角間天秤」といった興味深い土木遺産があった。「角間天秤」で北新川と南新川に分かれる大石水道。南新川を追っていくと吉井町の白壁の街並みにたどり着く。大石水道によって引き込まれた水は、一帯の米作・麦作を盛んにし、農作物の加工動力としての水車業も発達させた。

久留米と天領日田を結ぶ「日田往還」の宿場町としても重要だった吉井町には、江戸～明治期にかけて精米・製粉用の水車が数多く設置され、産業が発展した。財を成した吉井商人によって豪勢な白壁土蔵造りの町家が建てられ、明治後期には筑後軌道株式会社によって久留米～日田をつなぐ鉄道網がいち早く整備された。

水がつくり水が守ったまち

鏡田屋敷

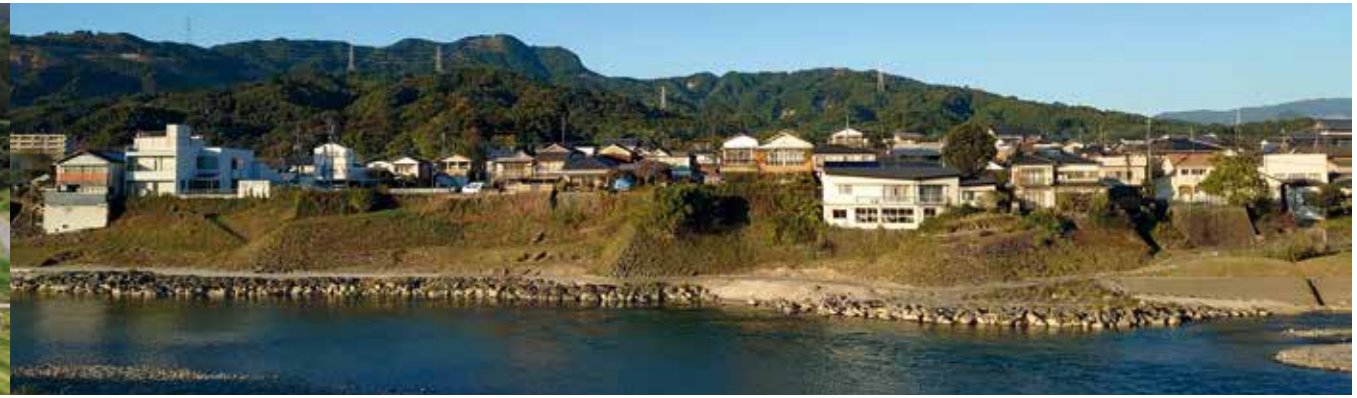
郡役所の官舎として建てられたといわれ、建物の正面部分は幕末の文久３年（1863）の建築。その後、個人の邸宅となり、台風被害で壊される予定だったが市に受け継がれた。内部は明治期の吉井らしい豪華な造り。市民活動で朝食処やギャラリーとして活用されている

○福岡県うきは市

南新川

宝暦 13 年（1763）の大火災をきっかけに町中にあったご神体が祀られた素盞嗚（すさのお）神社前を流れる南新川の浚渫風景

○福岡県うきは市



藩の戦略だった水刎

この地域には、過去の水害を記した古い石碑があちこちに残っている。筑後川は日本有数の暴れ川で、明治期以前には2年に1回以上の頻度で洪水が起きていた。

洪水が多い理由として、上流の地質が堅固で水がしみ込みにくいため川の流れが多くなることや、上流の急な地形に比べて中流域が緩やかで溢れやすいといった自然条件に加えて、江戸時代に筑後川をはさんで対立していた各藩が自藩本位の改修を競い合ったことが水害を拡大させたと言われている。

そんな江戸時代の治水施設の一つ「水刎（みずはね）」が、朝倉市杷木の川沿いに今も残っている。水刎は、洪水時の水当たりを相手側に刎ね出して自藩の河岸を護るもので、このような施設を各藩が両岸に築きあったり、時には規制しあう交渉も行われたと伝えらえている。

杷木に残る水刎群は、筑後川の水がちょうど河岸にあたる場所に、石で組み上げられた巨大な突起が川に向かって突き出していて、まるで山城の石垣のようにも見える独特の景観を形成している。

この地域に関わる水は筑後川だけではない。元々土地が高く筑後川の水を農耕に使えなかった場所では、周りの山地からの谷水が頼りだった。そして農地は平野部だけでなく、山の中にも拓かれた。筑後川を離れ、耳納山地の谷あいまで足を延ばすと、石垣の景観がすばらしい「つづら棚田」があった。つづら棚田には約300枚もの田があり、石垣の多くは400年前のものだそう。

谷内をながれる葛篭（つづら）川と、そこに流れ込む複数の谷川と人工の水路とを組み合わせ水を田に運ぶ仕組みで、限られた水を有効に使う工夫がされている。「日本棚田百選」にも選ばれた、起伏のある棚田の地形と、周辺の森林とが調和したこの景観も、水によって形作られたものだ。

葛篭地区のつづら棚田

時代が移り、水の治め方も変わった

土木遺産と味わう川魚料理と地酒

上／筑後川の迫力ある水音。先人たちの偉業に思いを馳せる
右下／「鯉の巣本店」にて。筑後川の生き河童といわれた「鯉とりまあしゃん」こと、故上村政雄さんの写真
左下／川の食文化を伝える鯉・鰻料理

酒蔵と屁こぎ河童

水神信仰から生まれたという河童伝説。夜明けダムの完成後に水運がとだえた後、「田主丸河童族」が立ち上がり、河童によるまちおこしが始まり、受け継がれている

◎福岡県久留米市

筑後川中流域の土地の低い地域では、洪水に備えた独特の造りの住家がみられる。「水屋」は、高さ1～2mの石垣の上に建てられ、普段は物置、洪水時には避難場所として使われた。「揚げ舟」は母屋や倉庫の天井に吊した舟で、避難用。洪水時の備蓄食料として、筑後川沿いでは、餅を水を入れたかめに沈めて保存食とする風習があったという。

耳納北麓でもう一つ、水と関わりの深い町が久留米市田主丸町。植木やくだもの狩りで有名なこの町を流れる筑後川の支流、巨瀬川に河童一族が住み着いたという伝説がある。河童が畏れとともに、身近な存在として語られてきた。ＪＲ田主丸駅も河童！愛嬌のある河童像を探しながら散策を楽しんだ。

「山苞（やまづと）の道」という農免道路沿いには、カフェやギャラリー、ワイナリー、観光農園など見どころもたくさんある。「美しい日本の歩きたくなる道」にも選ばれたこの道。またゆっくりと、訪れてみたい。

通称「かっぱ駅」の田主丸駅

そして、筑後川中流域には多くの古墳がある。特に耳納連山北麓には、４００基以上の古墳があるという。「田主丸大塚古墳」は６世紀の後半に築かれたと推定され、その時期の古墳としては九州最大規模とか。古墳の頂上からは筑後平野を一望することができた。

この地域に多くの古墳が築かれたことは、古代からたくさんの人々が暮らし栄えていた証しであり、まさに筑後川の恵みがあったため。筑後平野を見渡しながら、そう思った旅だった。（旅人 鈴木太郎）

水は文化を育み
この風景をつくってはぐんだ

田主丸大塚古墳にて

田主丸大塚古墳

国指定史跡「田主丸古墳群」の一つで6世紀後半の築造と推測され、古墳時代後期で最大の前方後円墳。筑後平野が一望できる

○ 福岡県久留米市

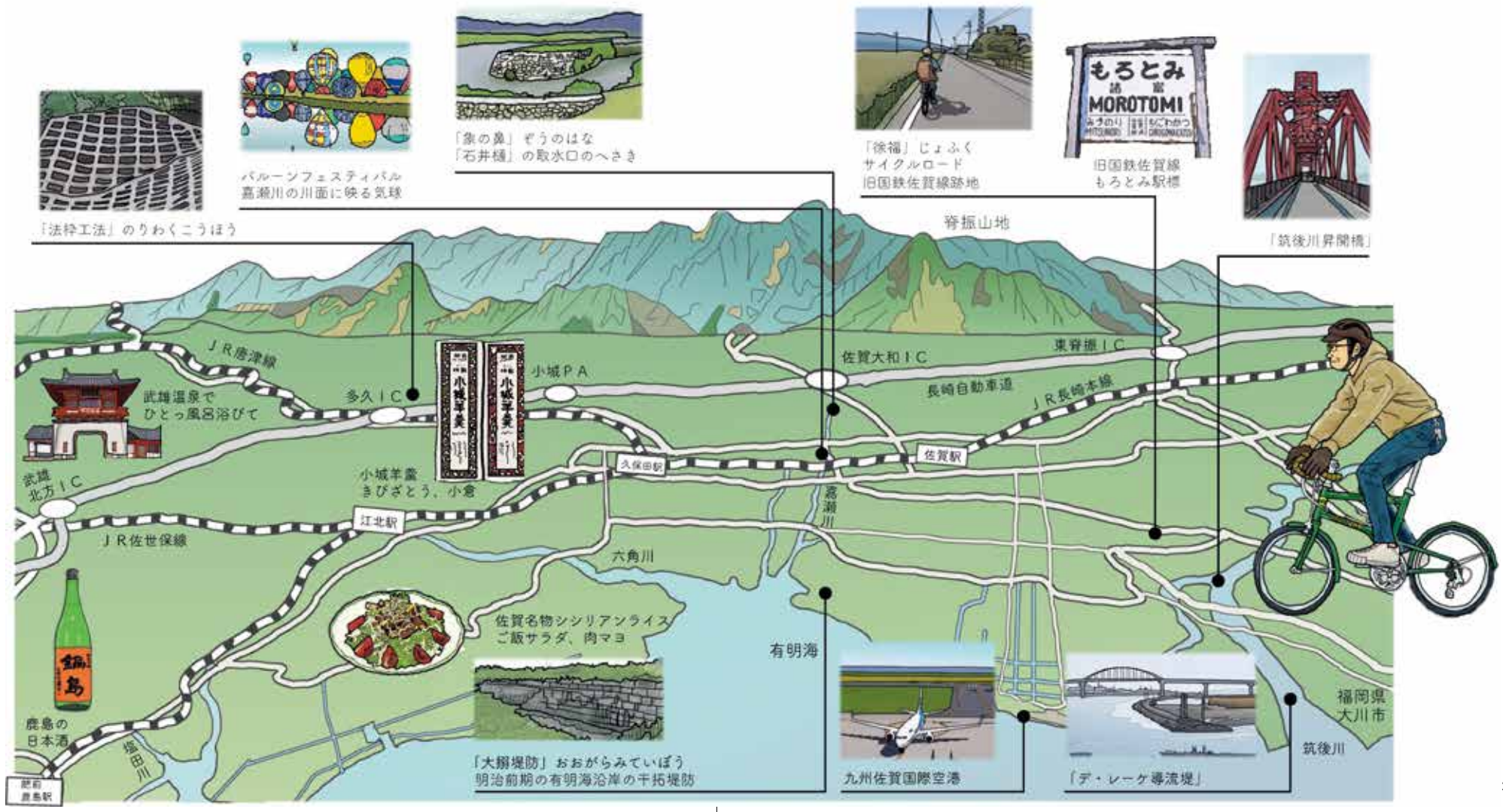
鳥の目でつくる土木遺産な自転車ルート

一般社団法人 九州地域づくり協会
小椎尾　優
文・イラスト

旧国鉄佐賀線は、福岡の「筑後柳河駅」から県を越え、「佐賀駅」までをむすぶローカル線でした。廃線跡地は一部がサイクリングロードになっており、平らな佐賀平野はサイクリストに優しく走りやすいコースです。

家具の町「大川」からスタートし、県境には「筑後川昇開橋」、沿道には旧鉄道駅の面影を残す「駅標」や「ホーム」、佐賀国際空港、干拓や河川堤防等のバラエティーに富んだ「土木遺産」を眺めることができます。シュガーロードと呼ばれた旧長崎街道を走ると「小城羊羹」のお店がたくさんあり、運動した身体に、甘いお菓子を補給します。

「肥前鹿島」まで「嘉瀬川」「六角川」「背振山」を眺めながらゆっくりと廻ります。さて、土木遺産な旅のラストは、お土産に美味しい日本酒を買って帰るとしましょうか。



どうぞ、土木遺産な旅へ！

つづら棚田
○ 福岡県うきは市

ツアーを YouTube で公開しています!

あとがき

私たちの街には、暮らしを良くしたいという夢とそれを叶えるために取り組んだ物語とともに、歴史的な装置として土木遺産が存在しています。なかには時を経て忍耐強く現在も活躍している施設もあります。今般、その土木遺産を、地域毎に異なる風土と地形をもとに様々な切り口で評価し、手づくりの旅へと誘うヒントとしてまとめました。

手づくりの旅に描くのは、自然に働きかけながら築かれた施設とその人物像、そして、地域をつないで人流・物流を促す橋やトンネルとその技術です。いずれも街を豊かにする夢の実現でした。旅（たび）の語源は幾つかの説があります。私たちが考えるのが、施設を使って資源やエネルギーを街づくりに役立てる、〈他（た）火（び）〉に近いイメージではないでしょうか。

本書には、幾つかの街が登場します。熊本県山鹿市周辺では道（ROAD）を、福岡県うきは市周辺では川（RIVER）を、さらに長崎市では港（PORT）に開かれた街を、それぞれのテーマに置いた旅づくりを試みました。

いずれも生活に密着した装置（施設）に焦点をあてた旅から戻って気付いたのが、道路と川そしてダムに係る語源がまさしく私たちが目指す「土木遺産な旅」を表していたことでした。道路の語源はライド（RIDE）すなわち交通手段です。古くは徒歩、次に馬車そして車へと現在に遷移します。道づくり・街づくりは時代毎に異なり、そこに風土と地形が大いに関係していたのです。

一方、川では古くから水引き争いがあり、言わば両岸がライバル（競争関係）で、何とか工面して水を引き豊かな土壌と街を作ろうとした履歴が各地にあります。これが川（RIVER）の語源になりました。ダム（堰・堤防）では、オランダの都市「アムステルダム」を思い浮かべてください。街を流れるアムステル川河口にダムを築き、肥沃な農地が生まれ、アムステルダムという都市が発展しました。港も漢字で水と巷、古くは水の門で、みなと。ラテン語で門を意味するPORTAはポルトガルの語源です。何れも街の形成と繋がっています。

こうした普段に私たちの生活を支えている施設にふれあい、先人の知恵に、現在の豊かな生活をオーバーラップさせながら、街を回遊する旅へ誘う『土木遺産な旅のススメ』を、ぜひご活用ください。そして、街の内外に多様な土木遺産ファンが増えることを、期待しています。

一般社団法人九州地域づくり協会　専務理事　赤星 文生

あとがき

仕事柄、まちを歩くと水を追います。

故郷長崎で子どもの頃に渇水を経験して育ち、地下水で暮らす耳納連山北麓へと移り住み、なんと豊かな水の暮らし！と感動したことがきっかけでした。滔々と流れる筑後川の水は福岡の都市圏へも送られていました。山に降った雨が川となり、目の前に広がる豊かな農地と都市の風景は、水で繋がっていることを、まだ幼かった娘たちに伝えたくて絵本に編んだものです。

それから20年、この本を編む貴重な機会をいただき、なんとその物語のほとんどが、土木遺産にまつわるものだったことは驚きでした。数百年の土木技術の継承と進化について知ると、眼鏡橋の落ちない謎、ただ走り抜けていたトンネルの坑門や構造、橋のぐるり全景まで、興味津々となりました。

飲んでいる水、食べもの、物流、エネルギー、防災。暮らしの陰にいつもいながら、土木遺産は寡黙です。

しかし、その土木構造物があればと願い、動いた地域があり、困難な現場に挑んだ技術者や、命をかけて工事に挑んだ人びとがつくりあげ、手入れされながら、まちはできている――そう気づいて問いかけると、たくさんの物語を語り始めます。

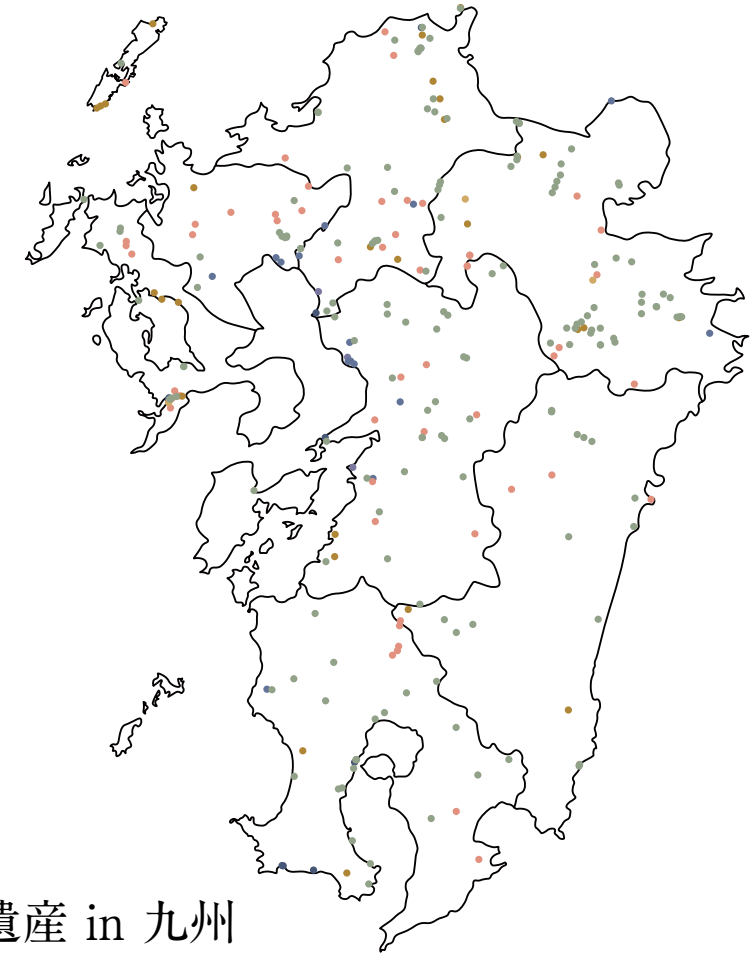
ひとつ見つけると、巨大な構造物から路傍の石碑まで、物語が繋がっていくのも土木遺産の魅力。そして、それは地域の底力です。

九州は実に広く、ご紹介できるのはほんの僅かでしたが、構造物のジャンルや地域を越えて編むことを試みました。ページをめくり、写真も楽しみながら「土木遺産な旅」を思い立っていただけたら幸いです。

この本は、一般社団法人九州地域づくり協会様の土木遺産に関わる歴史資料と記録をもとに、土木遺産活用策検討委員会の専門家の皆様との旅の実践によって生まれました。最後となりましたが、貴重な写真や文献をご提供いただき、土木遺産との出会いと、示唆を頂きましたすべての皆様に、感謝を申し上げたいと思います。

心より、ありがとうございました。

土木遺産な旅のススメ 編集長　髙山　美佳



土木遺産 in 九州
目録

- 橋（道路橋、鉄道橋、水路橋）
- 道（街道、道路、鉄路、石畳）
- 隧（道路トンネル、鉄道トンネル、水路トンネル）
- 堰（砂防ダム、発電ダム、水道ダム、農業ダム、可動堰・固定堰）
- 堤（河川堤防、干拓堤防、防波堤・護岸、各種擁壁・壁体）
- 門（運河閘門、農業樋門、各種取水水門）
- 港（岸壁、船着き場、ドック、灯台）
- 景（並木、運河、駅舎、排水機場、発電所、鉱山施設）

橋

〈福岡県〉

福 1　名島橋
福 2　名島川橋梁
福 6　若戸大橋
福 7　折尾高架橋
福 10　茶屋町橋梁
福 11　太鼓橋 (たいこばし)
福 12　北河内橋 (きたかわちはし)
福 13　関門橋
福 15　南河内橋 (みなみかわちばし)
福 16　中河内橋 (なかかわちばし)
福 19　欅坂橋梁 (けやきさかきょうりょう)
福 21　中津原橋梁 (なかつばるきょうりょう)
福 22　内田川橋梁（めがね橋)
福 24　奥ヶ谷池・奥ヶ谷川橋梁
福 25　久保鳥橋
福 26　秋月眼鏡橋
福 27　城山三連橋 (きやまさんれんばし)
福 28　佐井川橋
福 29　山国橋
福 30　筑後川昇開橋
福 33　倉目川橋・函渠 (かんきょ)
福 34　寄口橋 (よりぐちばし)
福 35　栗木野橋梁・第二大行司橋梁・宝珠山橋梁
福 39　大瀬橋（だいぜばし）
福 40　宮ヶ原橋 (みやがはるばし)
福 41　洗玉橋 (せんぎょくばし)
福 47　石岡橋
福 48　三池陣屋橋
福 49　早鐘眼鏡橋 (はやがねめがねばし)

筑後川昇開橋

〈佐賀県〉

佐 1　筑後川昇開橋
佐 5　踊瀬国道橋梁
　　(おどりせこくどうきょうりょう)
佐 10　栴檀橋 (せんだんばし)
佐 11　善左衛門橋・思案橋・
　　万部島の無名橋・中の橋
　　(ぜんじゃあばし・しあんばし・
　　まんべじまのむめいばし・なかのはし)
佐 18　脊振眼鏡橋
佐 19　湯野田橋

〈長崎県〉

長 1　幸橋 (さいわいばし)
長 2　福井川橋梁
長 3　樋口橋
長 7　西川内橋・護岸 (にしかわちばし)
長 8　西海橋
長 10　伊木力橋梁 (いきりききょうりょう)
長 11　山川内 (袴川) 橋梁
長 16　出島橋／ (旧) 新川口橋
長 22　眼鏡橋
長 24　本河内低部（水道）堰堤放水路橋
長 28　佐保橋

眼鏡橋

〈熊本県〉

熊 1　岩本橋
熊 7　高瀬眼鏡橋
熊 8　山鹿大橋
熊 9　菊池川橋梁
熊 10　湯町橋
熊 12　(廃) 広平橋梁 (こうひらきょうりょう)
熊 13　(廃) 幸野川橋梁 (こうのがわきょうりょう)
熊 14　立門橋 (たてかどばし)
熊 15　永山橋
熊 16　(廃) 姫井橋
熊 17　立野橋梁
熊 18　第一白川橋梁
熊 21　磐根橋 (いわねはし)
熊 23　御船川・八勢眼鏡橋
　　(みふねがわ・やせめがねばし)
熊 24　二俣橋 (ふたまたはし)
熊 25　下鶴橋
熊 27　雄亀滝橋 (おけだけばし)
熊 28　年禰橋 (としねはし)
熊 29　霊台橋（美里町霊台橋）
熊 30　通潤橋 (つうじゅんきょう)
熊 32　天門橋
熊 34　本渡祇園橋 (ほんどぎおんばし)
熊 37　夕葉橋 (ゆうばはし)
熊 38　笠松橋
熊 40　第一球磨川橋梁
熊 43　樅木吊橋 (もみきつりはし)
熊 44　津奈木重盤岩眼鏡橋
　　(つなぎちょうはんがんめがねばし)
熊 45　第二球磨川橋梁

笠松橋

〈大分県〉

大 9　石坂石畳道
大 24　今市石畳

● 隧

〈福岡県〉

福 9　宮田山トンネル
福 14　関門国道トンネル
福 18　金辺トンネル (きべとんねる)
福 20　(旧) 仲哀隧道 (ちゅうあいずいどう)
福 23　第一石坂トンネル
福 43　長野隧道
福 45　花巡廻水路隧道
　　(はなじゅんかいすいろずいどう)

花巡廻水路隧道

〈佐賀県〉

佐 2　大谷川隧道

〈長崎県〉

長 9　大村線の煉瓦トンネル群
　　(彼杵トンネル・川棚トンネル・
　　宮村トンネル他)
長 26　日見隧道 (ひみずいどう)
長 27　佐須奈隧道（東口）(さすなずいどう)
長 30　厳原町内の県道トンネル群
　　(浅藻隧道・安神隧道・久和隧道)

佐須奈隧道（東口）

〈熊本県〉

熊 41　(旧) 佐敷隧道 (さしきずいどう)
熊 42　(旧) 津奈木隧道 (つなぎずいどう)

〈大分県〉

大 2　(廃) キリズシのトンネル
大 7　青の洞門
大 11　川原隧道・石畳道
大 29　(廃) 第四小田無隧道
　　(だいよんおだなしずいどう)
大 30　(廃) 久戸谷隧道 (くどだにずいどう)
大 42　中ノ谷トンネル (なかのたにトンネル)

青の洞門

〈宮崎県〉

宮 10　矢岳第一トンネル（矢岳方）
宮 16　(廃) 山仮屋隧道 (やまかりやずいどう)

〈鹿児島県〉

鹿 4　大田発電所（轟隧道）
鹿 14　鳥越隧道

● 堰

〈福岡県〉

福 3　曲淵堰堤
福 4　遠賀川河口堰
福 36　筑後三堰（大石堰）
福 36　筑後三堰（恵利堰）
福 36　筑後三堰（山田堰）
福 46　臼払砂防堰堤
　　(うすのはらいさぼうえんてい)

〈佐賀県〉

佐 3　大黒井堰・堰群
佐 7　厳木ダム
佐 9　石井樋・多布施川 (いしいび・たふせがわ)
佐 15　三千石堰・草堰・野越 (さんぜんごくぜき)

厳木ダム

〈大分県〉

大 1　山国橋
大 4　呉橋
大 5　耶馬渓橋（オランダ橋）(やばけいばし)
大 6　馬渓橋 (ばけいばし)
大 8　羅漢寺橋
大 10　筏場眼鏡橋 (いかだばめがねはし)
大 12　鳥居橋
大 13　御沓橋 (みくつばし)
大 14　荒瀬橋
大 15　分寺橋 (ふじはし)
大 16　富士見橋
大 17　(廃) 妙見橋
大 18　赤松橋（赤松めがね橋）
大 21　万年橋
大 22　第三区 明治大分水路橋
大 23　竜原橋 (たつはるはし)
大 26　若宮井路笹無田石拱橋
　　(わかみいろささむたせっこうきょう)
大 27　鏡石拱橋 (かがみせっこうきょう)
大 28　宮瀬橋
大 31　山王橋
大 32　朝地橋
大 33　古殿橋 (ふるとのはし)
大 34　(旧) 犬飼橋
大 35　虹澗橋 (こうかんきょう)
大 36　細長橋
大 37　(旧) 明治橋
大 38　安政橋
大 39　初月橋 (しょげつばし)
大 40　近戸橋 (ちかどはし)
大 41　(廃) 箕ヶ谷橋 (みいがたにばし)・
　　(廃) 松株橋・(廃) 峠橋
大 44　轟木橋
大 45　鳴滝橋
大 46　原尻橋
大 47　轟橋
大 48　出合橋 (であいはし)
大 49　長瀬橋
大 50　柳橋 (やなばし)
大 52　明正井路 一号幹線一号橋（第一石拱橋）
　　(めいせいいろいちごうかんせん
　　いちごうきょう)
大 53　岩戸橋

鳥居橋

〈宮崎県〉

宮 1　高千穂峡 4 代橋（神都高千穂大橋・
　　高千穂大橋・神橋・槍飛橋）
宮 2　第三五ヶ瀬川橋梁
宮 3　綱ノ瀬川橋梁
宮 4　第一・第二小崎橋梁
宮 7　尾鈴橋
宮 8　本谷昭和橋 (ほんたにしょうわばし)
宮 9　美々津橋 (みみつはし)
宮 11　加久藤（堀切）峠
宮 12　月の木川橋 (めがね橋)
宮 13　石氷橋
宮 14　橋満橋 (はしみつはし)
宮 15　日向大橋
宮 17　花峯橋 (はなみねはし)
宮 19　堀川橋

〈鹿児島県〉

鹿 1　江ノ口橋 (えのくちはし)
鹿 2　穴川橋
鹿 3　新大橋
鹿 5　(旧) 安楽橋
鹿 6　姶良橋（別府川橋）
鹿 8　天保山橋 (てんぽざんばし)
鹿 9　(廃) 湖見橋
鹿 10　慈眼寺公園の石橋群
　　(じげんじこうえんのいしはしぐん)
鹿 11　貝底橋 (けぞこはし)
鹿 13　湊川橋
鹿 15　八ヶ代橋 (やかしろばし)
鹿 16　大園橋（めがね橋）(おおそのはし)
鹿 18　牧野地区用水の水路橋
鹿 25　咄合橋 (はきあいばし)
鹿 26　浜田橋
鹿 27　金山橋 (きんざんはし)
鹿 28　市柴橋 (いちしばはし)
鹿 30　鷲築橋 (さぎやなはし)
鹿 31　神宮橋
鹿 32　東郷橋
鹿 34　西田橋
鹿 35　高麗橋
鹿 36　玉江橋

玉江橋

● 道

〈長崎県〉

長 18　マリア園横（西側）の坂（ドンドン坂）の
　　石畳，マリア園前の石畳
長 21　オランダ坂周辺（切通し，オランダ坂，活
　　水坂，旧プロシア領事館東側の坂，海星
　　学園北側の坂）の石畳，石溝

オランダ坂周辺

門

〈福岡県〉

福 32　矩手水門（苦楽橋）
　　(かねてすいもん（くらくはし）)

〈熊本県〉

熊 3　末広開 (旧) 樋門群
熊 35　郡築三番町樋門
　　(ぐんちくさんばんちょうひもん)

港

〈福岡県〉

福 5　若松港石垣岸壁
福 50　三池港・港口閘門 (こうこうこうもん)・
　　補助水堰

三池港・港口閘門

〈長崎県〉

長 14　元船岸壁 (もとふながんぺき)

〈熊本県〉

熊 33　三角西港 護岸／(旧) 三角港
　　(みすみにしこう ごがん・
　　（きゅう）みすみこう)

〈鹿児島県〉

鹿 7　鹿児島港 (旧) 第一防波堤
鹿 12　枕崎港西防波堤・荷揚岸壁
鹿 19　知覧門浦荷揚場

鹿児島港 (旧) 第一防波堤

景

〈福岡県〉

福 8　堀川運河
福 38　楠木水防林・千間土居 (せんげんどい)
福 42　金堀谷掛樋
福 44　鞍転ばかし管渠(あんころばかしかんきょ)

〈佐賀県〉

佐 4　馬の頭・桃の川水路
　　(うまんかしら・ももものかわ)
佐 8　西芦刈水道
佐 16　蛤水道

〈長崎県〉

長 19　ししとき川下水路・同支線
長 29　万関運河 (まんぜきうんが)

〈熊本県〉

熊 19　鼻ぐり井手
熊 47　轟水源・轟泉水道
　　(とどろきすいげん・ごうせんすいどう)

〈大分県〉

大 25　野津原三渠 (のつはるさんきょ)
大 51　音無井路十二号分水

〈宮崎県〉

宮 18　堀川運河
宮 20　細島験潮場

細島験潮場

〈鹿児島県〉

鹿 20　丸池湧水暗渠
鹿 21　竹下川暗渠
鹿 22　会田川暗渠
鹿 23　瀬久谷川暗渠 (せくたにかわあんきょ)
鹿 24　山下須屋川暗渠

〈長崎県〉

長 4　菰田 (貯水池) 堰堤 (こもだえんてい)
長 5　岡本第二貯水池
長 6　山の田 (貯水池) 堰堤，溢流路
　　(いつりゅうろ)
長 12　小ヶ倉 (水道) 堰堤 (こがくらえんてい)
長 13　西山 (水道) 堰堤
長 23　本河内低部 (水道) 堰堤
長 25　本河内高部 (水道) 堰堤

本河内低部 (水道) 堰堤

〈熊本県〉

熊 11　下筌ダム・松原ダム
　　(しもうけだむ・まつばらだむ)
熊 20　渡鹿堰 (とろくぜき)
熊 26　鵜の瀬堰
熊 31　笹原の石磧 (ささはらのいしぜき)
熊 36　遥拝堰 (ようはいぜき)
熊 39　瀬戸石ダム
熊 46　市房ダム (いちふさだむ)

渡鹿堰

〈大分県〉

大 19　津房川ダム群（戦川砂防ダム、宮崎堰堤）
　　(つぶさがわだむぐん)
大 20　乙原貯水池 堰堤、取水塔
　　(おとばるちょすいち えんてい)
大 54　白水 (溜池) 堰堤
　　（はくすい（ためいけ）えんてい)
大 55　北川ダム
大 56　下筌ダム・松原ダム
　　(しもうけだむ・まつばらだむ)

〈宮崎県〉

宮 5　上椎葉ダム (かみしいばだむ)
宮 6　塚原ダム（塚原発電所）(つかばるだむ)

〈鹿児島県〉

鹿 17　川原園堰 (かわはらそのせき)
鹿 33　広瀬川（砂防）二号堰堤（砂防堰堤）

堤

〈福岡県〉

福 17　河内堰堤･弁室 (かわちえんてい･べんしつ)
福 31　筑後川導流堤
福 37　原鶴分水路

〈佐賀県〉

佐 12　(旧) 南西搦堤防 (なんせいがらみていぼう)
佐 13　大搦堤防 (おおがらみていぼう)
佐 14　鳥羽重ね (とりのはがさね)
佐 17　千栗堤防 (ちりくていぼう)

大溺堤防

〈長崎県〉

長 15　中島川変流部護岸
長 17　出島岸壁
長 20　銅座川暗渠部、護岸
　　(どうざかわあんきょぶ ごがん)

〈熊本県〉

熊 2　十番開（旧）堤防
　　(じゅうばんひらき（きゅう）ていぼう)
熊 4　明丑開 (旧) 堤防
　　(めいちゅうひらき (きゅう) ていぼう)
熊 5　明豊開 (旧) 堤防、大豊開 (旧) 堤防
　　(めいほうひらき（きゅう）ていぼう、
　　たいほうひらき（きゅう）ていぼう)
熊 6　清正刎・石塘 (きよまさはね・いしども)
熊 22　桑鶴の轡塘 (くわづるのくつわども)
熊 36　萩原堤防

〈大分県〉

大 3　香々地 新波止地区防波堤
　　(かかじしんはとちくぼうはてい)
大 43　池田捷水路

〈鹿児島県〉

鹿 37　長崎堤防

主要参考文献・参考資料

日本の近代土木遺産／社団法人 土木学会
日本の土木遺産／石井一郎著　森北出版
九州土木紀行 土木学会西部支部編／九州大学出版会
土木のこころ／田村喜子著　山海堂
九州の風土と石橋文化／九州農政局
九州遺産 近現代遺産編１０１／弦書房
造形土木家 百年の仕事／新潮社
ナガサキインサイトガイド／社団法人ナガサキベイデザインセンター
伝えたいふるさとの石橋／高山總合工業株式会社
九州の風土と石橋文化／九州農政局
熊本偉人伝　橋本勘五郎／季刊旅ムック１０１号
水の文化47号つなぐ橋／ミツカン水の文化センター
出島 つながる架け橋／長崎文献社
九州技報21号　西田橋の築造技法と改変履歴
／一般社団法人九州地方計画協会
浮羽郡誌／浮羽郡誌刊行会
浮羽郡郷土会誌宇枳波第四～六・八～十号
農業土木の偉人／九州農政局
浮羽郡豪雨水害寫眞集／新両筑新聞社
浮羽郡水害誌
／浮羽郡町村長会・浮羽郡町村長会議長会・浮羽郡公民会連合会
久留米藩宝暦「揆」二五〇年を考える（久留米藩三大「揆資料集）
／同実行委員会
川の記憶　ムラとムラ人　上下巻／田主丸町
浮羽郡誌／浮羽郡誌刊行会
暮らしと水と明日の郷土のために／筑後川水問題シンポジウム実行委員会
筑後川 河童の思い出／筑後川中流なつかしい写真募集実行委員会
田主丸町合併五〇周年記念誌 田主丸ん本／田主丸町
昭和28年西日本水害調査報告書／土木学会西部支部
福岡県文化百選　水編暮らし編／西日本新聞社
松浦川の伝統知・地域知／総合地球環境学研究所
明正井路「号幹線第二拱石橋についての考察
／寺村淳　土木学会論文集
白水貯水池堰堤水利施設の建築について／高野 弘之
北九州の近代化遺産／北九州地域史研究会編　弦書房
筑豊の近代化遺産／筑邦近代遺産研究会編　同右
筑豊の旅／筑豊地区観光協議会
高炉の神様／佐木隆三著　文春文庫
ものづくりの心を未来へ／財団法人 北九州都市協会
石炭が拓いた北九州の産業と文化／北九州産業技術保存継承センター
鉄が拓いた技術／同右
八幡東田物語／同右
日本の石炭産業遺産／徳永博文著　弦書房
まてりあ第60巻 第9号　東洋一の吊り橋「若戸大橋」が完成
／公益社団法人日本金属学会
九州の鉄道１００年／守谷久盛 神谷牧夫著　吉井書店
福岡鉄道御風土記／弓削信夫著　葦書房
毎日グラフ 若戸大橋完成記念号１９６２／毎日新聞社
サンデー毎日臨時増刊 関門!海底国道トンネル記念号／同右
街道と宿場町／アクロス福岡文化誌編纂委員会編　海鳥社
豊後街道を行く／松尾卓治著　弦書房
九州横断の道　阿蘇くまもと路

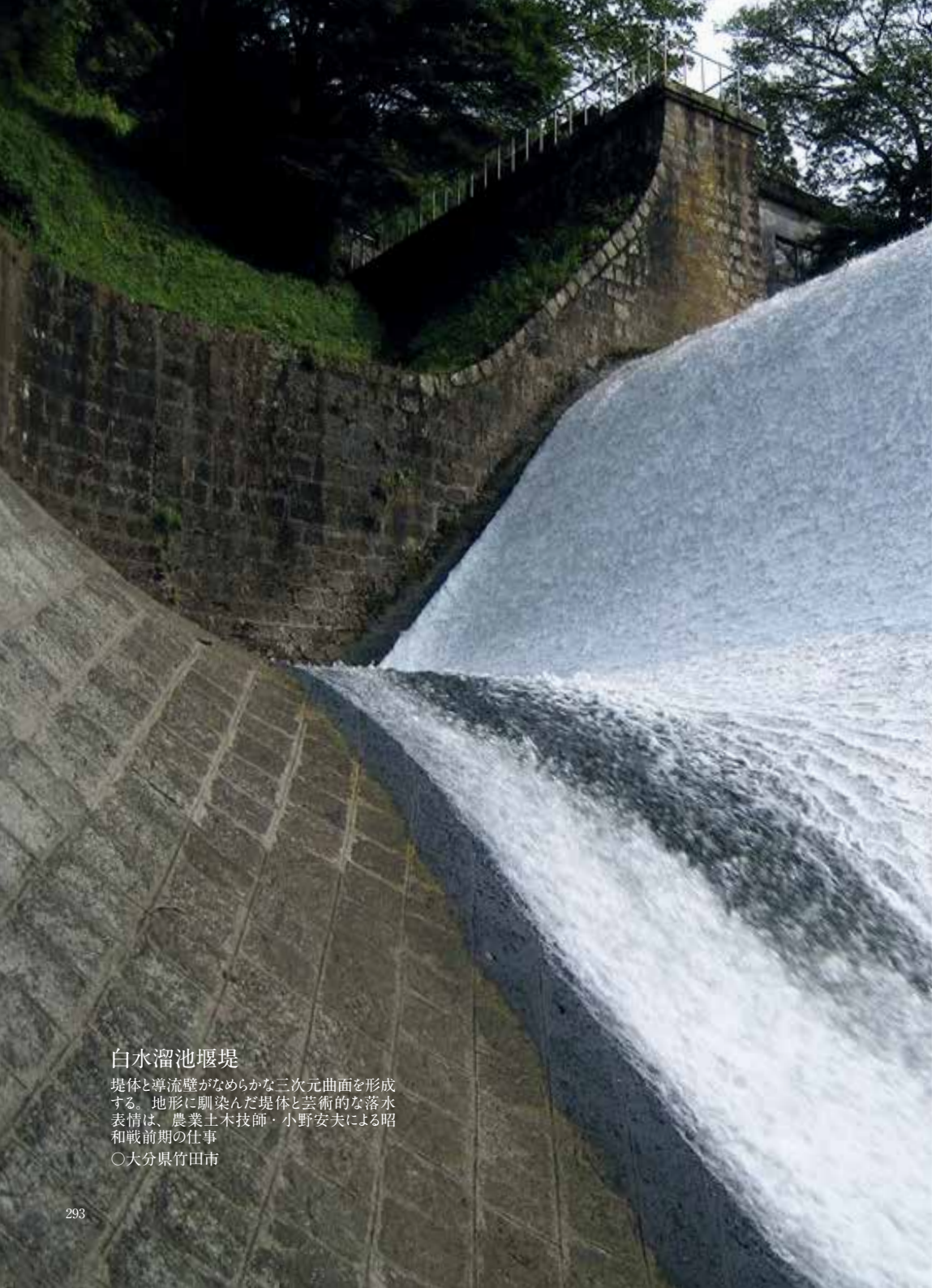
／ルートガイド編纂委員会著　九州風景街道推進会議
八代干拓の歴史～わが田は緑なり～／熊本県八代地域振興局
九州技報第17号・第21号／一般社団法人九州地方計画協会
高炉セメント百年史／鐵鋼スラグ協会
高炉セメントの技術史／檀康弘著
九州の道／建設省九州地方建設局 道路部道路計画第二課
九州の道 いま・むかし／建設省九州地方建設局監修　葦書房
長崎街道　大里・小倉と肥前6宿
／図書出版のぶ工房編集　発行人 遠藤順子
シュガーロードの砂糖文化とそのお菓子／独立行政法人 農畜産振興機構
道の話／日本道路建設業協会
九州の電源河川　耳川水系の今昔 with ダム
～地域と共に歩んだ90年とこれからの百年を目指して～
／九州電力株式会社 耳川水力整備事務所
２０２１年６月29日 九州豪雨記事／讀賣新聞
景観デザイン規範事例集（道路・橋梁・街路・公園編）
／国土技術政策総合研究所
景観工学の発展と風景学の現在
／日本産業技術史学会第36回年会 講演要旨集
九州技報17号
縦貫道全通に向けて最後の難関を克服九州自動車道加久藤トンネル
／一般社団法人九州地方計画協会
土木遺産を訪ねて「宮崎編」／財団法人 全国建設研究センター
とんところ地震／宮崎「橋の日」実行委員会
桜島の砂防／国土交通省・九州地方整備局 大隅工事事務所
会報九州　Vol. 1～32／一般社団法人 九州地域づくり協会
北九州土木遺産めぐり　門司・関門・下関編
北九州土木遺産めぐり　遠賀川と若松編
北九州土木遺産めぐり　長崎街道編
龍馬と歩くプレミアムツアー　長崎・中島川の橋めぐり
豊後街道と土木遺産めぐり～熊本震災復興へ、未来へ～
やまなみハイウェイと土木遺産めぐり～阿蘇・くじゅうの大自然～／同右
豊後街道を往く／一般社団法人 九州地域づくり協会
九州の風景街道　その１　総論／同右
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第1巻　人と技術と情熱の物語
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第2巻　人と技術と情熱の物語
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第3巻　人と技術と情熱の物語
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第4巻　荒ぶる自然に立ち向かう
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第5巻　特殊土壌への挑戦
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第6巻　道を拓く
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第7巻　熊本地震復興へ
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第8巻　高速道路の時代
新・土木遺産　プロジェクト・九州 第9巻　原点 全ては除災招福のために／同右

協力機関・写真協力（敬称略）

3ページ　水郷柳河の水落ち／高山美佳
8・9ページ　秋月眼鏡橋／髙橋裕美
10・11ページ　枕崎港／枕崎市
20・21ページ　眼鏡橋から長崎港へ／石橋知也
22・23ページ　通潤橋／同右
26ページ　『長崎古今集覧名勝図絵』／長崎歴史文化博物館
27ページ　同右
30ページ　シントキ川を見る／髙山美佳
　幣振坂から風頭山へ2点／石橋知也
31ページ　風頭山石切場跡／同右
42ページ　豊岡橋の旅／髙山美佳
43ページ　豊岡橋の楔石／同右
44ページ　荒瀬橋の補修工事／宇佐市観光協会
48ページ　名島橋／一般社団法人 九州地域づくり協会
51ページ　風頭公園から見る女神大橋／髙山美佳
52・53ページ　筑後大堰／西日本新聞社
54・55ページ　『筑後川繪圖』
　／筑後川歴史散策（筑後川河川事務所）より引用
55ページ　弥五郎親子河童／髙山美佳
56・57ページ　大石堰の旅／石橋知也
60ページ　『筑後川繪圖』
　／筑後川歴史散策（筑後川河川事務所）より引用
61ページ　袋野隧道見学ツアー／浮羽まるごと博物館協議会
64・65ページ　山田堰／寺村淳
70ページ　川原園井堰の作業風景／同右
71ページ　川原園井堰／同右
72・73ページ　筑後吉井の白壁の街並み／石橋知也
74ページ　デ・レーケ導流堤／一般社団法人 九州地域づくり協会
76ページ　28水害・柴刈村／『浮羽郡水害誌』・田主丸町
77ページ　28水害・大石堰／同右
78ページ　筑後軌道／個人蔵
79ページ　夜明ダム／日田市
81ページ　石井樋／一般社団法人 九州地域づくり協会
83ページ　蛤水道／同右
84ページ　遠賀川河口堰の魚道で遊ぶ子どもたち／和泉大作
85ページ　アザメの瀬／株式会社 建設技術研究所
88ページ　明正井路1号幹線第二拱石橋／豊後大野市教育委員会
89ページ　大正時代の第二拱石橋の工事風景／個人蔵
90ページ　音無井路十二号分水／和泉大作
91ページ　円形分水／田中尚人
92・93ページ　白水溜池堰堤／石橋知也
95ページ　山田堰の看板の前で／鈴木太郎
99ページ　堀川と川ひらた／直方市石炭記念館
100ページ　直方市石炭記念館の旅／髙山美佳
101ページ　九州鉄道記念館／同右
103ページ　完成間近の第二高炉を訪れた要人たち／新日鐵住金株式会社
106・107ページ　関門鉄道トンネルの内部／関門トンネル記念館
128ページ　若戸音頭を踊る／毎日新聞社
129ページ　若戸大橋工事風景3点／同右
130・131ページ　工事途中の若戸大橋／同右
138・139ページ　『西国内海名所一覧』／北九州市立自然史・歴史博物館

140ページ　『西国内海名所一覧』／同右
142ページ　『象志』／国立国会図書館
143ページ　かすてら饅頭／戸高慶一郎
146ページ　『花井曙錦の行烈』／江戸東京博物館
148ページ　熊本城内堀の坪井川／田中尚人
150ページ　熊本城／同右
151ページ　鼻ぐり井手／同右
152～155ページ　『潮止之図』／個人蔵
162・163ページ　『西郷隆盛大軍ヲ引卒シ肥後国熊本城ヲ陥ト
　安政橋ニ到所城兵モ討テ出両軍於橋上ニ大激戦ニ及之図』
　／国立国会図書館
164～167ページ　豊後街道を往く
　／一般社団法人 九州地域づくり協会
168ページ　今市の石畳／大分市
169ページ　『熊本藩船鶴崎入港船絵馬』／大分市教育委員会
173ページ　参勤交代肥後街道（あそ路）徒歩の旅
　／NPO法人自然を愛する会JOC
174ページ　日見新道／長崎大学附属図書館
175ページ　大正時代の日見トンネル／同右
176ページ　日見トンネル／石橋知也
177ページ　岩隈の切通／笹尾俊博
181ページ　長崎街道の旅／髙山美佳
182ページ　昭和時代の国道3号／南日本新聞社
184ページ　本河内高部・低部ダムツアー／髙橋裕美
186ページ　当時の運送の様子／九州電力株式会社耳川水力整備事務所
187ページ　延岡市の索道基地／同右
188ページ　工事中の塚原ダム／同右
189ページ　塚原ダムの足場／同右
189ページ　バケットによるコンクリート打設
　／九州電力株式会社耳川水力整備事務所
190・191ページ　上椎葉ダム／同右
194ページ　上椎葉ダム上流側底部／同右
　上椎葉ダム最底部の工事中の仮排水路／同右
195ページ　万歳する工事関係者たち／同右
196ページ　曽木発電所遺構／髙橋裕美
197ページ　立野ダムの工事風景／田中尚人
198ページ　桜咲く市房ダム／水上村
201ページ　八丁原地熱発電所／九州電力株式会社
204ページ　野焼きの風景／一般社団法人 九州地域づくり協会
　草原と牛馬／阿蘇市
206・207ページ　朝焼けのミルクロード／同右
208ページ　砂防堰堤／髙橋裕美
212ページ　『とんところ地震』絵本／宮崎「橋の日」実行委員会
213ページ　畳堤／髙橋裕美
217ページ　本河内高部・低部ダム見学／髙山美佳
218・219ページ　千代の園酒造にて／同右
224ページ　柳川の川下り／戸高慶一郎
225ページ　通潤橋の上を歩く／石橋知也
226ページ　大石堰への小径／鈴木太郎
227ページ　本河内底部ダム放水路橋／髙橋裕美
228ページ　ほとめき歩き・石垣神社／髙山美佳
230ページ　歩く唐津街道の旅／旧唐津街道ジャーニーラン・ウォーク
231ページ　高校生フォトツアー／ながさきサンセットロード振興会
233ページ　八女福島の白壁の街並み／髙山美佳
234ページ　福島城ジオラマ模型を見る／同右
235ページ　福島城の鯱／同右

235ページ　福島城地図／八女広域青年大学
236ページ　水神様／高山美佳
236ページ　路地の水路／同右
237ページ　文化池／同右
239ページ　NIPPONIA HOTEL／同右
堺屋（旧木下家住宅）の床の間／同右
堺屋（旧木下家住宅）の縁側にて／同右
旧往還道沿いの賑わい／同右
旧往還道を自転車が行く／同右
240・241ページ　旧往還道沿いの生業／同右
243ページ　小栗峠ロードパーク／同右
245ページ　高井川橋の旅／同右
246ページ　腹切り坂／同右
248ページ　菊池川／田中尚人
米米惣門ツアー／同右
249ページ　惣門／高橋裕美
米米惣門ツアー／田中尚人
250ページ　米米惣門ツアー・光専寺にて／高山美佳
木屋本店麹体験／同右
251ページ　町屋にて／同右
252ページ　千代の園酒造史料館／同右
253ページ　田の神／同右
米せんべいづくり体験／同右
254ページ　千代の園酒造／同右
山鹿の小路／同右
255ページ　米米惣門ツアー／同右
258ページ　大石堰の旅／同右
259ページ　吉井町の旅／石橋知也
260～263ページ　旅ノート風景17点／鈴木太郎
264ページ　南新川の浚渫風景／石橋知也
265ページ　鏡田屋敷／高山美佳
266・267ページ　旅ノート風景2点／鈴木太郎
268ページ　大石堰の旅／田中尚人
鯉とりまあしゃんと鯉料理／同右
269ページ　屁こき河童／寺村淳
270・271ページ　旅ノート風景2点／鈴木太郎
272・273ページ　大塚古墳より筑後平野を眺める／田中尚人
274・275ページ　土木遺産な自転車ルート・イラストマップ／小椎尾優
276・277ページ　つづらの棚田の旅／鈴木太郎
283～287ページ　土木遺産in九州目録写真／一般社団法人 九州地域づくり協会
293ページ　白水堰堤／石橋知也
295ページ　関門トンネルの工事風景／毎日新聞社
表紙　ミルクロード／阿蘇市
見返し　西海橋の全体図／一般社団法人 九州地域づくり協会 所蔵
見返し　星野川に架かる宮ケ原橋／林博徳



白水溜池堰堤

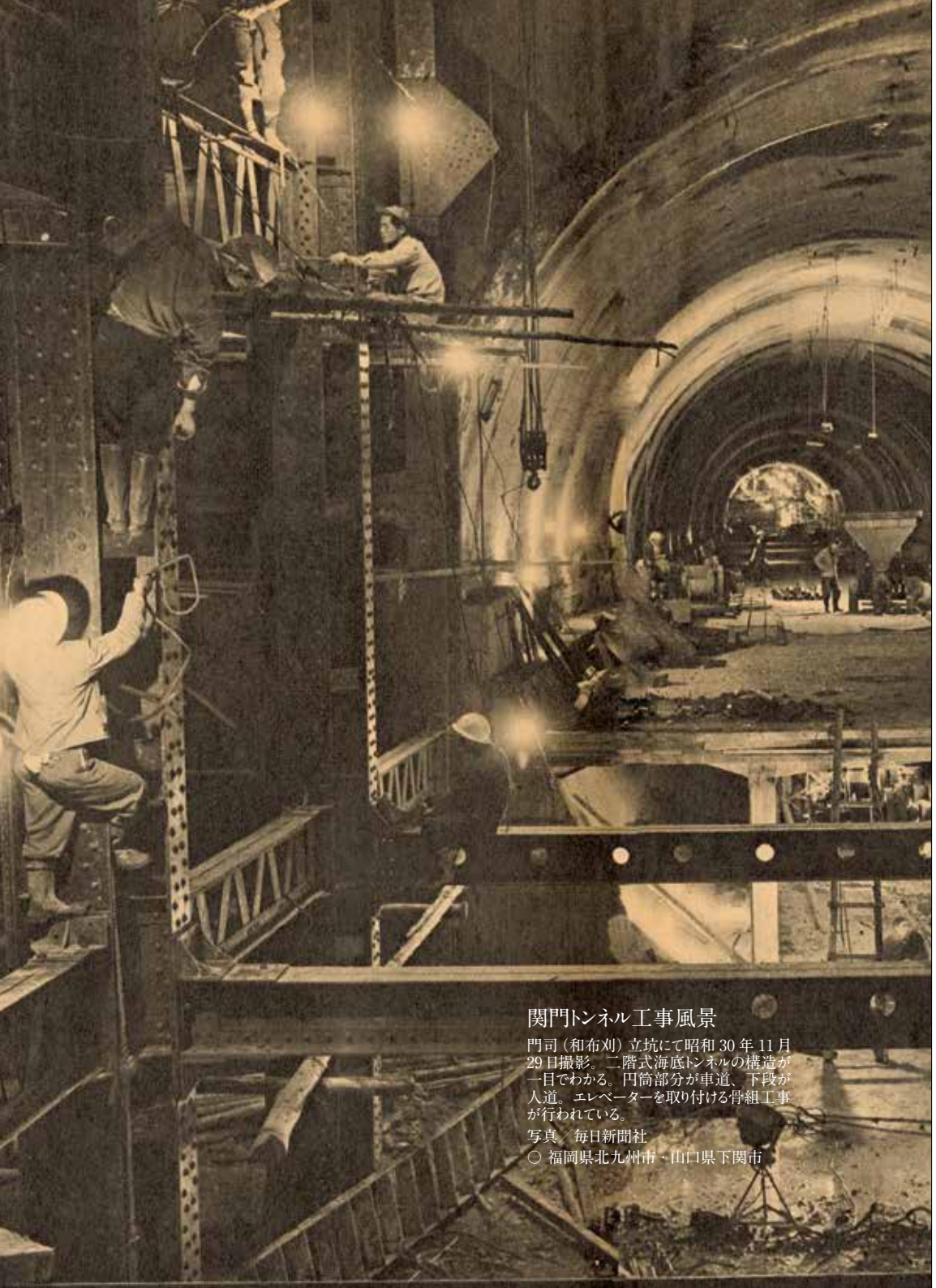
堤体と導流壁がなめらかな三次元曲面を形成する。地形に馴染んだ堤体と芸術的な落水表情は、農業土木技師・小野安夫による昭和戦前期の仕事

〇大分県竹田市

岡城跡

難攻不落といわれた由縁は、地獄谷と呼ばれる断崖絶壁上に築かれた石垣群。文禄３年（1594）に城主となった中川秀成が、土の城から総石垣造りの石の城へと大改修を行った。高度な技術による多様な石積が大分の石文化を物語る

○ 大分県竹田市



関門トンネル工事風景

門司（和布刈）立坑にて昭和30年11月29日撮影。二階式海底トンネルの構造が一目でわかる。円筒部分が車道、下段が人道。エレベーターを取り付ける骨組工事が行われている。
写真／毎日新聞社
○ 福岡県北九州市・山口県下関市

この本は令和元年度から取り組んだ
土木遺産活用策検討事業によって
編集・制作いたしました。

土木遺産活用策検討委員会

委 員 長　玉川　孝道（前 株式会社西日本新聞社 副社長）
副委員長　吉武　哲信（九州工業大学 建設社会工学科 教授）
田中　尚人（熊本大学大学院 先端科学研究部 准教授）
髙山　美佳
（LOCAL & DESIGN株式会社 代表取締役／地域デザイナー）

土木遺産活用策検討委員会ワーキンググループ

委 員 長　田中　尚人（同上）
副委員長　髙山　美佳（同上）
石橋　知也（長崎大学大学院 工学研究科 准教授）
寺村　淳（第一工科大学 工学部 環境エネルギー工学科 准教授）
片田江　由佳（プロセスプランナー／コンサルタント）

一般社団法人 九州地域づくり協会

理 事 長　田中　愼一郎
専務理事　赤星　文生
志賀　浩二
秀徳　典穂
小椎尾　優
松井　健之
岩﨑　香織
浦川　エミ

株式会社 建設技術研究所

和泉　大作
石踊　賢之郎
笹尾　俊博
清水　嘉一
鈴木　太郎
髙橋　裕美
多田隈　由紀
玉村　美樹
土屋　信夫
山本　裕貴

〈編集・デザイン〉
髙山　美佳

〈イラスト〉
小椎尾　優

風土と地形を体感する旅へ

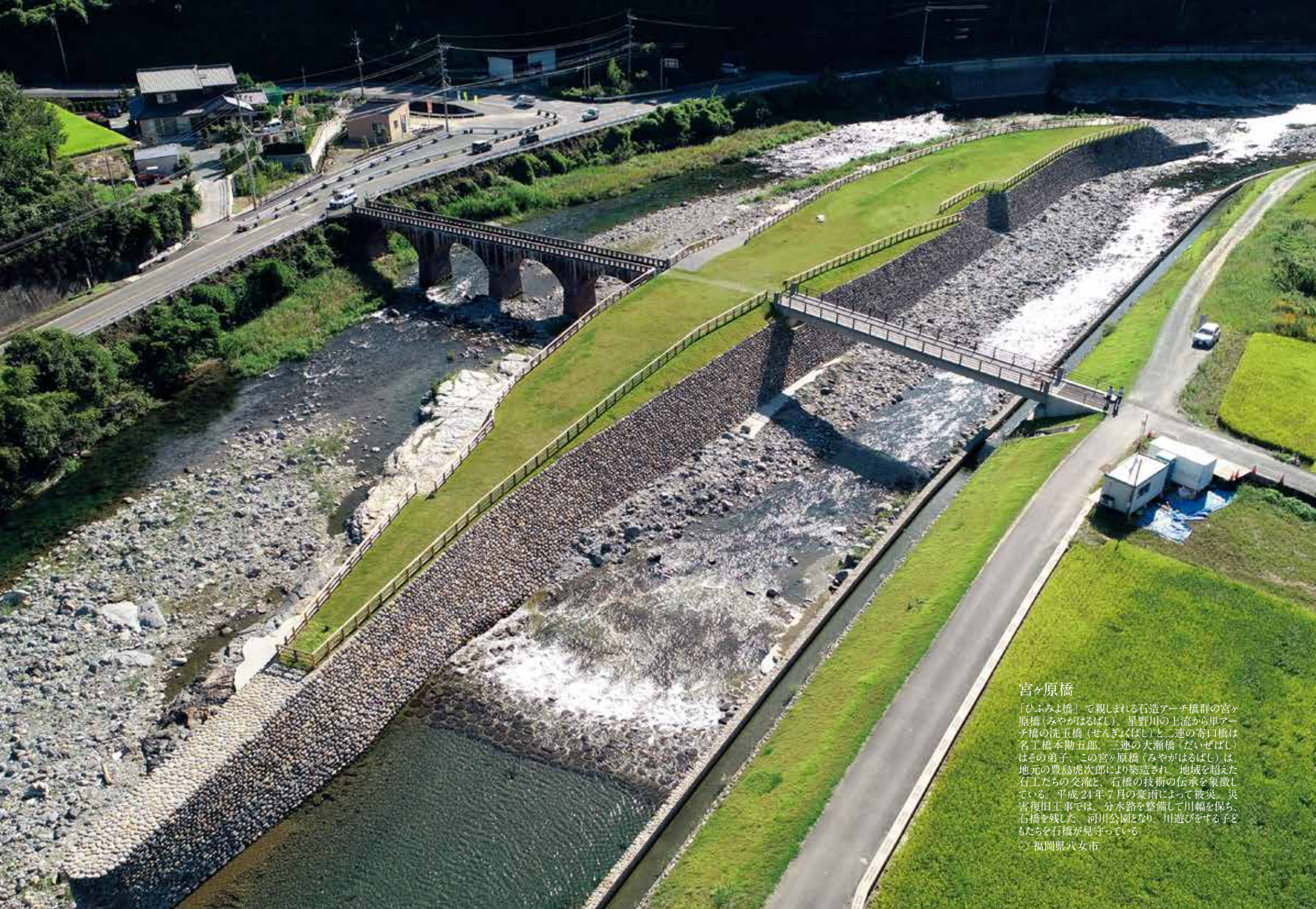
土木遺産な旅のススメ

発行 一般社団法人九州地域づくり協会

〒812-0013
福岡県福岡市博多区博多駅東2-5-19
サンライフ第3ビル4階

令和5年3月30日発行

© General Incorporated Association Kyushu Chiikidukuri Kyokai 2023
Printed in Japan
本書の内容を無断で複写、複製することは、
法律で認められた場合を除き、禁じられています。



宮ヶ原橋

「ひふみよ橋」で親しまれる石造アーチ橋群の宮ヶ原橋（みやがはるばし）。星野川の上流から単アーチ橋の洗玉橋（せんぎょくばし）と二連の寄口橋は名工橋本勘五郎、三連の大瀬橋（だいぜばし）はその弟子、この宮ヶ原橋（みやがはるばし）は、地元の豊島虎次郎により築造され、地域を超えた石工たちの交流と、石橋の技術の伝承を象徴している。平成24年7月の豪雨によって被災。災害復旧工事では、分水路を整備して川幅を保ち、石橋を残した。河川公園となり、川遊びをする子どもたちを石橋が見守っている

○ 福岡県八女市